

アンコール王朝の金銀財宝はどこに行ったか

ミャンマーに安住の地を見出したヒンドゥー教神像 2 体

石澤良昭(上智大学教授)



アンコール朝最盛期の 12 世紀頃から 13 世紀前半にかけて、ジャヤヴァルマン 7 世はインドシナ半島の大半を支配する大帝国をつくった。ちょうど日本の平安時代から鎌倉時代の初めにかけてであった。アンコールの地には巨大な石造伽藍アンコール・ワットや都城^{みやこのじょう}アンコール・トムなどが次々と建立され、絢爛豪華^{けんらんごうか}な光輝あふれる都城であったという。その都城は 1432 年頃西隣国アユタヤ朝軍によって徹底的に破壊され、放棄されてしまった。



このアンコール文明なるものは、メコン川につながるトンレサップ湖西北岸一帯に約 600 年にわたり栄えた世界有数の大文明であった。その都城の広さは東京都区内とほぼ同じ面積である。インドシナ半島のすべての道(王道)はアンコールにつながっていた。往時の人々が行きかい、各地の物産が届いていた。

日本ではフランシスコ・ザビエルが鹿児島に来てキリスト教を伝えた同じ頃、ポルトガル人やスペイン人が旧都アンコールを訪れていた。彼らはまだ栄華^{よいん}の余韻が残るその都城とアンコール・ワットの素晴らしさに胸を打たれ、近隣の住民に聞いてまわり、実測もしていた。しかしこれをいつ、だれが造営したのかわからなかった。彼らの結論は、(1) アレキサンダー大王(紀元前 336-323 年)が建立した、(2) ローマ(紀元前 272~紀元 476 年)の人たちが造った、(3) ユダヤ人たちが建てた、など仮説として書き残された。彼らはその見聞録の中で、いかに大きく高い文明のものであったかをつぶさに報告している。



現在のアンコール遺跡群とその文化景観は、訪れる人々に深い感動と共感呼び起こし、大文明の醍醐味^{だいごみ}と知的陶醉^{ちてきとうすい}を与えてくれる。広大な熱帯のサバンナ気候の多雨林地帯の中にあって、アンコール時代の人たちは自然の恵みと猛威をどのように利用し、組み替えて一歩ずつ大文明を構築していったのか、その過程を知ることにより、アンコール・ワットから私たちはより多くの教訓と示唆^{しき}を読み取り学ぶことができる。アンコール・ワットを中心とするアジア最大級の文化

遺産は、歴史的にまだ十分に解明されていない。

この時代アンコール都城では金色に輝く多くの寺院と大楼阁がそびえ立ち、さながら「神の世界」を模した観があった。近隣を征服したとき持ち帰った財宝は、王宮前の広場のクラン^{しど}に納められていた。

また当時最も価値ある金銀財宝といえば、金箔に塗られた神像や仏像であった。なかでも青銅製のこれら彫像は寺院内に安置され、^{きんぜん}燦然と輝いていたという。アンコール王朝の財宝に関する記録としては、1934年フランス極東学院の建築家トルーヴェがアンコール・ワットの中央祠堂の真下を調査した。近隣の村人たちが、財宝が埋められていると言っていたからであった。しかしその中央祠堂の下36mの旧地面から出てきたものは、30cmほどの金製の円盤と若干の奉納品であった。これは俗にいう地鎮祭時の「^{しづめもの}鎮物」であった。それではアンコール・ワット時代の金銀財宝はどこに行ってしまったのか？

アンコール時代の素晴らしい石造彫像は、フランスのギメ東洋美術館とプノンペンの国立博物館で見ることができる。後者の国立博物館の入口のフロアには、ショー・ウィンドーに入って青銅製の彫像が納められ、小品ながら逸品もあり鑑賞できる。しかし同フロアの奥まったところに巨大なヴィシュヌ横臥像が展示されている。これだけ大きいので目立って見える。



この事例からも判るように、アンコール時代の青銅像の大きいものはすべてアユタヤ朝との戦争で持ち去られたのであった。このヴィシュヌ像は西バライのメボン寺院近くの泥の中に埋まっていたから、持ち去られることがなくカンボジアに残った。



東南アジア大陸部の戦争ではいつも、金属製の機器・祭式用具・装飾品などが略奪品であった。

1981年ビルマ(ミャンマー)調査の時、マンダレー市内のマナムニ・パゴダ(別名アラカン・パゴダ)内で、鉄格子の向こうに大青銅彫像2体が陳列されていた。まさかマンダレー市でアンコール時代の彫刻を見ろとは思わなかったのでびっくりした。本物かどうか手で触ってみた。参詣するビルマ人たちも、

見ているとこの彫像の胸や首や足などにワンタッチしているのであった。同行のマンダレー大学の先生に聞くと、この彫像は^{ねいげん}靈験あらたかなので参詣者はみな触っていくという。特に自分の身体の痛いところとか病気の患部と同じ箇所を触ってい

くのであった。

このヒンドゥー教神像 2 体はドヴァラパーラ（門衛神）であった。はじめ何故これら彫像がマンダレーにあるのか意味がわからなかった。

まず 1432 年頃アンコール朝陥落時に戦利品の一部としてアユタヤ朝軍が持ち去ったものであった。その後アユタヤ朝は 1569 年ビルマのタウンゲー朝 2 代目バイナウン王（1551 1581 年）の攻撃によりアユタヤ王都が占領された。その戦争の目的は、繁栄するアユタヤの財宝略奪とベンガル湾貿易権の争奪などであった。アユタヤ朝は 18 年間にわたりビルマの属領となっていた。その戦争時にアユタヤからの戦利品としてビルマのバゴー（ペーグ）都城に持ち去られたのであった。ところがこの 2 体の神像はバゴーが安住の地ではなかった。

1599 年にヤカイン（アラカン）王国の船隊がバゴーを攻撃し、この神像を持ち去ったのであった。次の安住の地はシットゥエー（アキヤブ）であった。その後コンバウン王朝の第 6 代バドン王（1782 1819 年）がそのアキヤブを征討し、1784 年にマンダレー近くの首都アマラプーラに持ち込まれた。そして第 11 代のティーボー王（1878 1885 年）治下の 1884 年に現在のマハムニ・パゴダに移されたのであった。

かつて栄光のアンコール朝にあって多くのクメール人から崇拜されてきた 2 体の神像は、今度はビルマ人から礼拝され病氣治癒の効能をかわれて安置され、やっと安住の地を見い出しているのである。朝日サンツアー旅行時の添乗員角氏の「アンコールの財宝はどこに」の一言から、その神像の流浪の旅を思い出し記した。

（1999 年 9 月 3 日 アンコール於）